
闇のユートピア

松田 修



白水社

白水叢書 67
闇のユートピア

定価一六〇〇円

一九八二年二月五日印刷
二年二月二〇日発行

おまじ

季 修
昭 三
雄

白水社

神田小川町三の二四
即〇三(三九)七八一一
部〇三(三九)七八二一
京九一三三二二八
郵便番号一〇一

理想社印刷・加瀬製本

著者略歴

一九二七年生

一九五二年京大卒

日本近世文学専攻

法大教授

主要著書

「日本近世文学の成立」

「日本芸能史論考」

「刺青・性・死」

「日本の異端文学」

「藤の文化史」

「非在への架橋」

「日本逃亡幻譚」

「複眼の視座」他

(分) 1395 (製) 90670 (出) 6911

闇のユートピア

松田 修



白水社

闇のユートピア・目次

無頼と聖性——神としての世直し 5

星伝承における反逆の意味 27

暗黒水系の美学 55

遁世——アウトサイド・イン 101

芭蕉・ある逃亡譚 123

殉死情死論 151

切腹——死のパロキスム 171

騙りの機能——幕末演劇空間の神々 199

曲亭馬琴・妖異の美学 219

解説——異様の美への愛と執着（馬場あき子）

あとがき 267

257

無頼と聖性——神としての世直し

唐獅子牡丹のパターン

やくざとやくざむ

「直し」の神々

よたものと神

おげ・おげたたちの意味

かぶきものたち

二系列の異端者

世直しとやくざ

大塩中斎と三島由紀夫

唐獅子牡丹のパターン

六〇年代の創造しえた美的様式は何か。いうまでもなく、高倉健主演『昭和残俠伝』シリーズがそれであろう。

とある日本の片すみで、「平和な」庶民生活が営まれている。一匹狼のやくざ高倉健（ないし健たち）にさえ、しばしば藤純子に体现される平凡な日常的幸福がほほえみかけ、ふと彼はその日常にからみとられかねない。ところが、その、とろとろとなまあつたかい幸福に影がさす。「幸福」がその虚構性を露呈する。

権力と資本が癒着し、その醜い末端に、悪いやくざが踊り、庶民は泣く。いわく、立ちのきである、米の買いしめである。港湾整備である、大建設である。よいやくざ組織は、庶民を防衛しきれない。動揺する庶民、日和見の一派。これでもか、これでもかと、凌辱が、残虐が続く。

しかし、高倉健は動かない。耐えに耐え、撓めに撓めた満身の反り。踏みつぶけられた橋の沈黙の反り、石垣の稜線の全重圧を支える反り、おち入り一瞬前の息をつめた女形の反り、耐えることの極限における、危うい危うい一瞬の反り。

健は起つ。突如起つ。親分が殺されたのだ。あるいは組織をカバーしてくれていた旦那衆がやられたのだ。

彼は組の若い者の動揺を押えて（しまをまもれ、通夜をしると命じて）、単身斬りこんでゆく。むしろ淡々と、日常に、はた原点に還るもののごとく。

凜乎とした眉目に雪が散る。悲しみはもはや覆われ、意気がりもせず、気負いもせず、静かな、あまりにも静かな死地への歩みである。この時、観客は、健の孤独をあらためて知る。彼は、やくざという異端の集団においてさえ、異端者なのだ——。だが、その時ただ一人、雪の四つ辻で、無言で傘をさしかける男、たとえば池部良。男同士の盟約のために、義理のために、いやしばしば、もつと切なくもつと根源的な衝動のために——いいうべくんば健への殉死者、森田必勝^{まさかつ}として——。

ああ何たる殺戮。権力・資本・暴力の同床異夢、豪華な酒宴の場は一瞬にして明るい地獄となる。腕がとび、血が紫に噴き、どすとどすが鋼^{はがね}の匂いをはなち、みな殺しの唄が流れる。唐獅子は吠え、たける。

すべては終わった。ひかれてゆく健。みおくり、たちつくす藤純子。小さな世直しの成就である。それもつかの間の、虚構の虚構であるにせよ、健の自己犠牲の成就を信じなければ、観客は救われな^い。口ぶえ、合唱、どよめき、じわ、そして重い沈黙のあと、暗闇に包まれたまんま、ほんの一とき、信じたつもりになってみる、はかない、はかない世直しを——。

ありふれたあらすじになってしまったけれども、このパターンを、一映画資本の計算が生みだしたものとすることは、おそらく謬りであろう。このパターンの背後には、世直しとやくざとの骨がらみ

の関係、おそらくは千年単位で計量すべき伝統が、たしかに流れているのである。

おそれずいえば、世直しはやくざによらねばならない。世直しはやくざによってはじめて可能である。ではそもそも、やくざとは、また世直しとは、一体どういう性格をもっているのだろうか。

やくざとやくざむ

やくざの語源については、普通、三枚がるたの無点の組合せから、無益・無用・不良の意となったと解かれている。その代表的なものをあげよう。

やくざといふは、博奕に三枚といふものをするに、八九の数を高目上々とつまるは数にならず、八九三廿につまる故、悪きことの隠語を八九三といひ始めたるなり（『渭浜庵随筆』、原本未見）

まことにもっともらしい、合理的な解釈であると思う。しかし、これが本当かどうか、私にはまだ納得できないものがある。

無頼という意味での「やくざ」の上限は、まだたしかめていない。これは全くの想像説にすぎないが、このやくざは古代語ヤクサムから来たことばではないか。

近者、朕わんが身み不和やぐさむ。願ふ、三宝の威に頼りて、身体安和なることを得むとす（『日本書紀』——以下便宜「書紀」とする——天武紀・朱鳥元年）

三月壬午朔丙申、天皇玉体不念おほみやまひしたまひて、水土弗調やくみたまふ〔書紀〕履中紀・六年)

これらからみると、やくさむとは、体の不和・違和・異常をさすものごとくである。「水土弗調」をやくさむと訓むのは、人体と自然とのコレスポンドを体感していた古代人の認識のパターンを示すものであろう。

さらにやくさむは、生理だけではなく、心理についても用いられることばであった。

是によりて日神御身こそりて不平やくさみたまふ、かれいかりまして〔書紀〕神代卷上

このばあいは、「不平不満の意」と解されているが(岩波古典大系本注)そのことからいえば、肉体と精神の両者に通じて、すべて平らならざる状態、調和せぬ状態が、すなわちやくさむであった。おそらくしばしば人間をこえて、自然天候の不順をさすことばでさえあった。すべてをひっくりくるんで、非日常的な状態がやくさむであった。

かくしてやくさむ者とは、生理としては病者であり、精神としては異端(狂気・逸脱・無頼)である。^{〔1〕}やくさむ者たちは、流浪定着のいかんをとわず、常民の社会からはみ出ていたにちがいない。

不平やくさむことが悲恨いかることであるという論理は、まことに示唆ぶかい。何らかの問題に対するいかりが、しばしば彼をやくさむものとし、あるいは逆にいかりの対象をやくさむものとしたのではないか。

いかりのゆえにやくさむ人々——常民の次元から、はみだしたものの、はずれたもの、それをより普遍的なことばにおきかえるならば、「神」がもっともふさわしいことばであろう。

しかし、このやくさむは、古代語としてのみ記録され、以後の文献には、私の調査の不十分さもあるだろうが、たえて顔を出さないようである。

近世にはいって、やくざという、全く品くだれる意味内容で、再登場するまでは、文献の上に、このことばをみいだすことは、はなはだ困難である。

しかし、おそらく日本の暗部では、闇の世界、隠れ里の次元では、根づよく底流していたのではないだろうか。

いったん死滅した（死滅したかに見える）古代刺青が、『陰徳太平記』の記述をみとめれば十六世紀末、みとめないまでも十七世紀初頭に、突如狂気の噴流をみせたように（拙著平凡社刊『刺青・性・死——逆光の日本美——』参照）底辺の社会では、静かに潜在していたと思われる。

では、このやくさむ人々、やくさむ神々は、一体何を機能し、何を職能としたのか、私はそれを、「直し」であると思う。

「直し」の神々

やくさむが、不平・不和という用字で示されている事実は、私にははなはだ興味深いことである。不平・不和なるものこそが、もっとも、平・和の状態を希求するものであった。不平・不調・不和なるもの、やくさむものとは、すなわち、平・調・和のための犠牲神ではなかったか。不平・不調・不

和を、平・調・和に正すこと、それを古代語ではどういったか、これはおそらく確実に、直すであろう。普通でない状態を、普通の状態へ、悪いことを、よい状態へ――。

とがあやまち
咎過 在らむをば、神直び、大直びに見直し、開き直して〔祝詞〕

天の御舎の内に坐す皇神等は、荒び給ひ、健び給ふ事なくして……神直日、大直日に直し給ひて〔祝詞〕

不和不平む状態を、不和不平むもの自身が、直すという理解には、おそらく古代的発想そのものが息づいている。本来的には神に属するこの機能を、やがて人間が担当するようになる。

やくさむ人たちは、常民からすこしくずれたところに位置しつつ、それゆえに常民の守護機能を担当していたのだ。

彼らはおそらく、古代国家、律令国家のメカニズムに、すべてが組みこまれてゆく現実をまさめにみつづ、ことさら定着を拒否し、一種の神呪・神占をこととしていたものであろう。

このような私の語りくちは、あまりにも飛躍的にすぎるかもしれない。また、資料の根本的欠落をおぎなうためには、私のレトリックは、貧困にすぎるようである。しかしここに、やくざと今日なお類縁のことは、よたものをもってくればどうであろうか。

よたものと神

よたものとは、第一に「役に立たぬもの」であり、第二に「やくざもの」であり、第三に「なまけもの・怠惰者」の意であるという。もちろん、これを酔ん坊よたに直結することは正しくなく、むしろ、琉球におけるよた・ゆたと関連させて考えるべきであろう。

よた・ゆたとは、巫女・市子をさし、神がかりの託宣をし、また占いにたずさわるものであった（古代のよたは男嬬・神主とされている）。おそらく悠遠の古代において、本土においてもよたたちが神と極めて近い地平で活躍していたものと考えられる。そのかすかな残映は、周知の「よたを飛ばす」というイデオムである。ゆた、よた、ゆんたは、神のことばであった。神意・神語が信じられなくなつた時代、あるいは、よた・ゆたたちが神意をわたくしに矯ためて恣意をのべた時代の到来を、このイデオムはものがたつているが、さらにさかのぼれば、神意・神語がそのままに信じられた時代をも、ものがたるものといえよう。神と常民の断絶の以前には当然、神と常民の連帯があり、神語の顛落があるからには、神語の栄えた日々の実在を信じないわけにはいかないだろう。

このようにみれば、よたとよたもの、やくざむとやくざものとは、まったく同じ軌跡を描いているということになる。よた、やくざむ、ともに古代聖性の表現であり、中ほどはうずもれ、近世にいたって顕在化したと図式化してよいだろう。

琉球におけるよた・ゆたが、公職ののろや家々の根神にんかみとは別の神であったことは、注目し値するだろう。のろや根神と比較するとき、よた・ゆたたち、それらの神々の神性は、かなり低いものであったのではないか。そして、人の世においては、なおさら急速に下降を続けるのみであった。

すごろくや博奕の道は、本来いうまでもなく神意を問う聖なる手段であつたわけで、『宇治拾遺物語』その他にみえるべくちうちたちは、零落しながらも、神と交渉し交感したものの記憶を、なおとどめていることは、ことに興味ふかいものがある。

おげ・おけたたちの意味

この、「よた——よたを飛ばす——よたもの」にみられる神の零落の構造は、「おげ——おぐる」においてほとんど同様にみうるだろう。

「おげ」は、山師・詐欺師(福岡県久留米・佐賀・老岐)であり、偽物(山口県玖珂郡・老岐)、詐欺(愛媛・大分・福岡・佐賀)である。

ひいてはうそ・ほら・いんちぎ(山口・徳島・鹿児島)の意であり、おぐる(おげる)とは、人を欺いて自分の利益を図ること、だますこと、さらにはふざけてみせることである(四国・九州)。

今日このように、方言としても負の意味でしか使用されないことばであるが、本来的にはおそらく、違った機能を持っていたはずである(説経「小栗」の命名の意味なども、このあたりから考えるべきか)。

兵庫県武庫郡山田村^{おこ}小河(現宝塚市)の住民は漁者、茶筌作りを業としていた。同県養父郡^{やぶ}大屋村大杉では、無宿無鑑札の漁者を「おげた」といった。『綜合日本民俗語彙』ではこれから、日本海側を本拠とする漂泊漁民の集団を想定しているが、さらに、新潟県柏崎地方の芸能集団「おげ」(汚下)の存在の指摘は、示唆的である。彼らは、門附けをして歩くもので、祭礼には招かれて、神楽・手

踊・手品・おどけ問答をし、山窩さんかと乞食こじきの中間に評価（2）されていた。

おそらく常民にとってかつては神の使であり、神そのものであった漂泊民おげが、神の機能を失いつつ、漂泊という姿のみは保ちつづけたものであろう。常民は、不当にも彼らを卑賤視し、差別しつつ、一方、彼らのおどずれをこころまちし、その予祝や芸能を享受したのである。

かつての神は今や、山師であり、詐欺漢であり、無頼漢である。「汚下」というようなことさらの用字によって凌辱される存在でしかない（三重県度会郡・兵庫県飾磨郡・愛媛県大三島）。

これはまったく、よた——よたものと同じの構造であった。

かぶきものたち

神やらいにはふられた神々の復権の呪術として、近世刺青がよみがえった日、若肌を委ねたもの名をかぶきものとよぶ。私は今日まで、何度となくかぶきの意義を説きつづけて来た（法政大学出版局刊『日本近世文学の成立』参照）。そして今日なお、ますます、説きつづけねばなるまいと思っている。かぶきの本来の意味が、傾かぶくこと、正常な状態から異常な状態になること、水平から傾斜へ、あるいは垂直から傾斜へを意味することは、周知の通りである。

不平や不和くむものこそ、平・調・和へ世を直したように、傾なき者こそ、あらたなる平衡を求めるものであった。真の平衡・真の秩序にいたるためには、もっとも傾かねばならないのである。

秘密結社としての組を作り、主従関係をさえ否定し、ついには二十五歳の若ざかりを槍で貫かれた大鳥逸平（前掲書参照）において典型的なように、かぶきものたちはたしかに反社会的であり、反秩序